

ヴァイシエーシカ学派の数体 (samkhya) 論

宮 元 啓 一

一、序

二、ヴァイシエーシカ学派に於ける数体

三、数体理論の展開——特に複数觀念の獲得に就いて

A 知覚が二数体を生ずることに就いて

B 知覚の消滅によって二数体が消滅することに就いて

C 知覚の過程に就いて

D 知覚の非同時に就いて

四、結

一、序

古代インドにおいて、数を象徴的、あるいは純実用的な見地から論ずるのでなく、数觀念なるものを我々が如何にして獲得するかという問題を純粹に理論的・体系的に追究した文献は余り豊富にはない。「自然哲学」を以て知られるヴァイシエーシカ哲学の文献がその類としては唯一の資料であると言つても過言ではなからう。本稿はヴァイシエーシカ哲学の最古の画期的綱要書『プラシャスタパーダ・パーシヤ』(Prāśastapadabhāṣya) の記述を中心

にして、同哲学の一見難解そうな理論展開を解明することを目的とする。

二、ヴァイシェーシカ哲学に於ける数体

ヴァイシェーシカ哲学体系に於て、sankhya (漢訳：数) は二十四の性質 (guna) の一つに挙げられている。本稿はこの様な性質の一つとしての sankhya なる語に対して「数」ではなく、仮に「数体」という訳語を与えているが、その理由は以下の事情による。

PBh では sankhya は次の様に定義されている。

「sankhya とは、一等の日常的行为の原因のごとである」

註釈によれば、この「日常的行为」(vyavahāra) は、「観念」(jñāna, pratyaya) と「言語表現」(śabda, abhidhāna) の両者を示すものである。⁽³⁾ すなわち、我々が「一」「二」と頭の中で考え、言葉として口に出してものを数える場合、そのような行為を成立せしめる何ものかが存在し、それが sankhya と称せられるのである。とすれば、「一」(eka)、「二」(dvī) なる「数」観念、「数」の言語表現を成立せしめるものを「数」と訳すことには問題があると思われる。ヴァイシェーシカ学派の sankhya は数を数たらしめるものであり、ある意味で形相的な性格を有するものである。個々に sankhya を見るならば、「一」(eka) なる数を数たらしめる ekatva (一つたること) であり、「二」(dvī) なる数を数たらしめる dvīva (二つたること) である。よって、訳語としては「数原型」あたりが適当かと思うが、やや煩雑なので、本稿では「数体」を仮の訳語としたい。

ekatva, dvitva 等もこれに応じて「一数体」「二数体」と表記する。

三、数体理論の展開——特に複数観念の獲得に就いて

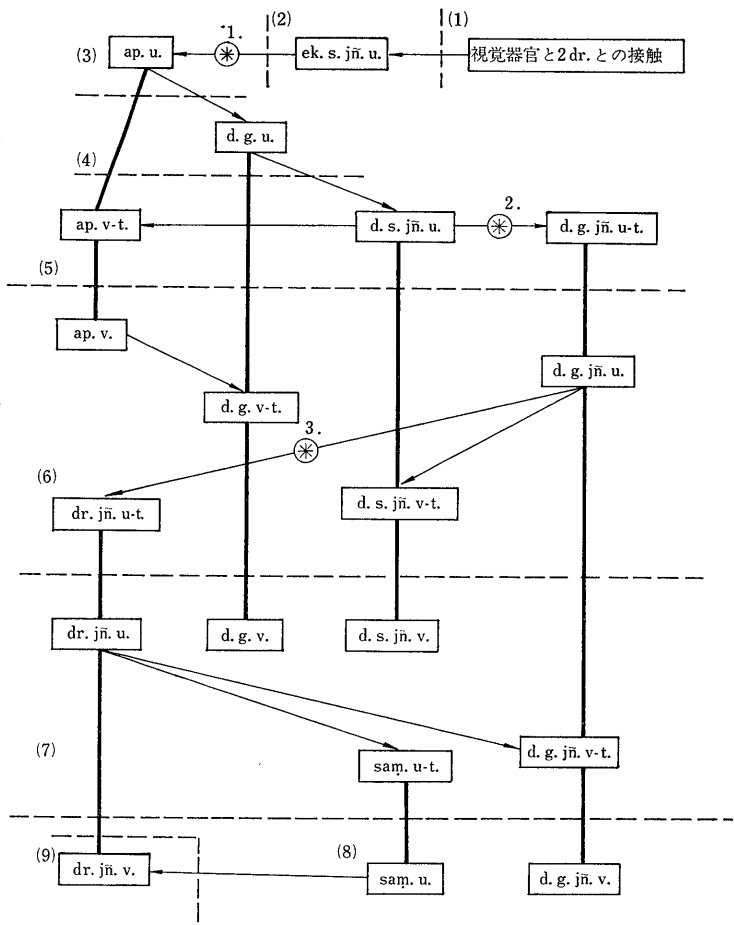
ヴァイシシェーシカ学派の数体理論では、一数体と (ekatva) 二数体 (dvitva) 以上の数体とは明確に区別して扱われる。⁽⁴⁾

まず、一数体は一つの実体に内属するものであり、その実体が常恒であれば常恒、非常恒であれば非常恒である。これは知覚とは関わりなく純客観的に事物の側に存すると考えられ、それを知覚することは、単にその一数体と感官が接触するだけで成立する。

これに対して、二数体以上の数体は二つ以上の実体に内属するものであってすべて非常恒である。ところが二数体等は知覚とは関わりなく事物の側に存するとは考えられない。何と何を数えるかは全く各人の主観に俟つより外にはない。⁽⁵⁾つまり、選択という主観的な行為を介して始めて二数体等が二つ以上の実体に内属するものとして登場し、しかる後、その二数体等を対象として知覚が生ずる、という過程を想定せざるを得なくなる。

PBd 等はこれに就いて、二数体の発生・消滅の理論を以て、次の様な過程を想定している。⁽⁶⁾ (図表参照)

- (1) 視覚器官 (cakṣus) と二つの実体 (dravya) とが接触 (samnikarṣa) する。
- (2) 一数体一般 (ekatvasāmānya) の知覚 (jñāna, buddhi) が発生する。⁽⁷⁾
- (3) 一数体一般、一数体一般と二数体 (ekatva) との関係 (sambandha) 一数体一般の知覚 (以上三者) によって、



ek. ekatva	ap. apeksābuddhi	ex. d. g. jñ. v. t.
d. dvitva	u. utpatti	
dr. dravya	u. t. utpadyamānatā	dvitvaguṇajñāna-
g. guṇa	v. vināśa	vinaśyattā
s. sāmānya	v. t. vinaśyattā	
jñ. jñāna	saṃ. saṃskāra	

二つの二数体を対象とする知覚（契機⁽⁸⁾知：apeksabuddhi）が発生する。

(4) その知覚を契機として（apeksya）二つの二数体から、その基体（astraya）（二つの実体）に於て、二数体（dvitva）が発生する⁽⁹⁾。

(5) 二数体一般（dvitvasamānya）の知覚が生ずる。同時に、(3)で発生した知覚が向消滅状態（vinaśyati⁽¹⁰⁾）に達する。同時に、二数体一般、二数体一般と二数体との関係、二数体一般の知覚（以上三者）によって、二数体の知覚が向発生状態（utpadyamānata）に達する。

(6) (3)で発生した知覚が消滅する。同時に、二数体が向消滅状態に達する。同時に、二数体の知覚が発生する。同時に、二数体一般の知覚が向消滅状態に達する。同時に、二数体、二数体と二つの実体との関係、二数体の知覚（以上三者）によって、「二つの実体」（dve dravye）なる知覚が向発生状態に達する。

(7) 「二つの実体」なる知覚が発生する。同時に、二数体が消滅する。同時に、二数体一般の知覚が消滅する。同時に、「二つの実体」の知覚から、潜在的形成功力（samskāra）が向発生状態に達する。同時に、二数体の知覚が向消滅状態に達する。

(8) 潜在的形成功力が発生する。同時に、二数体の知覚が消滅する。

(9) 「二つの実体」なる知覚が消滅する。

以上が潜在的形成功力に転化するまでの二数体の発生・消滅の過程であるが、この様な過程の想定を可能にする、乃至要請する幾つかの主要な理論的根拠を以下に明らかにしたい。

A、知覚が二数体を生ずることに就いて

前述の過程(4)に於て、二数体という外的対象が知覚(すなわち契機知: apeksabuddhi)によって発生するとされ
ているが、これは当然考察の対象となる。

シュリーダラ (Śrīdhara) はまず次の様に問題を処理しようとする。すなわち、知覚から外的対象 (bahyartha) が生ずることは世間的な常識を超えるもの (alaukika) ではなく、むしろ経験的に認められることである⁽¹³⁾。しかしこれに対しては次の様に反論が加えられる。

「(二)の(二)数体なる) 性質 (guṇa) の所縁 (ālambana) (つまり実体) が二数体を顯現せしめるもの (abhi-
vyāñjaka) であることは確定的であるから、知覚は直接の規定因 (anantaryāyiyama) ではあり得ない⁽¹⁴⁾。」
そこでシュリーダラは論式を以てこの問題に対する正式の解答とする。

[P] 二数体は知覚より生ずるものである。

[H] なぜなら、(二)数体は) 必ず唯一人の認識者によってしか知られないからである。

[U] およそ必ず唯一人の認識者によってしか知られないものは全て知覚より生ずるものである。例えば快感等の様に。

[Up] 二数体もまた必ず唯一人の認識者によってしか知られない。

[N] 故にこれ(二数体)もまた知覚より生ずるものである。⁽¹⁵⁾

ウダヤナ (Udayana) は同様の趣旨の論式を述べるとともに、もう一つ別の論式を示している。

[P] 契機知は二数体を生ぜしめるものである。

[H] なぜなら、(契機知は二数体を) 顕現せしめるものではなく、かつ現にそれ(二数体)を付き随わせるからである。

[U] 例えば音声に対する結合と分離の様に⁽¹⁷⁾。

この様に知覚が外的対象を生ぜしめることは二数体の場合必ず要請されなければならない。すなわち、外的な事物の側に存する数体は、先にも触れた如く、知覚の介入しない限り一数体以外のものではあり得ない。ヴァイシェーシカ哲学によれば、我々はあらかじめ事物の側に存する二数体等を知覚することによって二等の数観念を獲得するのではなく、知覚によって二数体等を生み出し、然る後にその二数体等を改めて知覚して初めて二等の数観念を獲得するのである。

しかし、この場合注意して置かなければならないのは、知覚が外的対象たる二数体を生み出すというのは決して知覚が二数体の内属因 (samavāyikāraṇa) (＝質料因) であることを意味するのではないということである。そもそもヴァイシェーシカ哲学に於ては、性質である知覚が同じく性質である二数体の内属因となることは許され得ない⁽¹⁸⁾。ヴィヨーマシヴァ (Vyomasiva) 等も明記する如く、二数体の内属因は二つの実体であり、非内属因 (asamavāyikāraṇa) は二つの一数体である。そして知覚はもう一つの原因、すなわち動力因 (nimittakāraṇa) に外ならないのである⁽¹⁹⁾。

B 知覚の消滅によって二数体が消滅することに就いて

前述の過程(6)に於て、二数体発生時の動力因であった知覚(すなわち契機知 *apeksabuddhi*)が消滅することによって二数体が向消滅状態に達し、その後過程(7)に於て消滅すると説かれている。これに關しては、性質は動力因の消滅によって消滅することがあり得るのか、という一般的な形で問題が提起される。例えば布(*Datta*)はその内属因である糸(*tantu*)が消滅すれば消滅するが、梭(*tuti*)等の動力因が消滅しても何ら影響を蒙らない。

シュリーダラはこの問題に対して特に理論的に解答してはいない。彼によれば性質が動力因の消滅によって消滅を来すのは經驗的な事実(*dr̥ṣṭya*)である。その例証として彼は解脱の場合を挙げる。すなわち、解脱(*mokṣa*)を獲得する状態に達した時、解脱の寸前に存する最後の真知(*antyaatvāina*)は、身体(*saṁsāra*)の消滅によって消滅する。この場合、真知は性質であり、身体は動力因であるとされる⁽²⁰⁾。

これに対してウダヤナは次の様な論式を用いている。

[P] 二数体は動力因の消滅によって消滅する。

[H] なぜなら、(一)二数体は、その(二)基体(拠所たる二つの実体)が消滅することなく、かつ、両立を許さな

い他の性質が出現することがなくとも、性質であるにもかかわらず消滅するからである。

[U] 例えば(解脱の寸前に存する)最後の知の様⁽²¹⁾。

C 知覚の過程に就いて

過程(3) (図表の㊸) に於て一数体の知覚は、一数体一般の知覚に先行される。過程(5) (図表の㊹) に於て、二数体の知覚は二数体一般の知覚に先行される。さらに過程(6) (図表の㊺) に於て、「二つの実体」なる知覚(以下時として単に実体の知覚と述べることもある)は一数体の知覚に先行される。

この様に知覚の過程は必ずその対象の内属階梯の高いものから順次に下降するものとされている。この規則の適用によってヴァイシェーシカ哲学に於ける二数体の発生・消滅の過程の叙述が一見複雑な様相を呈しているのである。しかしながら、ヴァイシェーシカ哲学にとってこれは決して気まぐれの過剰想定ではないのである。何となれば、ヴァイシェーシカ哲学に於ける知覚論に目を向けるならば、この規則は必然的に要請されるものであるということを我々は認めざるを得ないからである。

周知の如く、ヴァイシェーシカ学派では知覚 (pratyakṣa) を二種に分類する。ひとつは非概念知 (nirvikalpaka-pratyakṣa) であり、未だ概念化作用を受けず、言語とも結びつかない段階の知覚である。そしてひとつは概念知 (savikalpaka-pratyakṣa) であり、既に概念化作用を受け、言語と結びついた段階の知覚である。この概念知は、⁽²²⁾ 有限定要素 (viśeṣana) によって限定されたもの (viśiṣṭa) の知覚でもある。例えば「牛」(go) という形の知覚もそれに当たる。「牛」の知覚とは「牛一般」(gotva) によって限定されたものの知覚に外ならないのである。

本稿で問題にしている二数体の発生・消滅の理論にとって最も古く、かつ最も重要な資料を提供している Pbh に於て、非概念知、概念知という成熟した術語による知覚の分類は見られないが、内容的には明らかにそれに相当すると見做し得る分類がなされている。⁽²³⁾ すなわち、前者は「単なるものそのものの知覚」(svatupalocanamūtra)、『後者は「普通・特殊・実体・性質・運動という限定要素に依拠する、靈魂と内官の接触から生ずる」(samanya-visēṣa-dravya-guṇa-karma-visēṣaṅgpekṣād āma-manah-sannikarsat pratyakṣam utpadyate)』と云う言葉によりて表現されている。

この様な知覚論を踏まえた上で、二数体の発生と消滅の理論を以下に検討しよう。

まず、「二つの実体」なる知覚に就いて見れば、ここで得られる知覚は単なる実体のみ知覚ではなく、明らかに何らかの限定要素 (visēṣana) によって限定されたもの (visiṣṭa) の知覚である。それは例えば、「杖を持つ人」(dandin) という知覚の場合、この知覚は単なる人のみの知覚ではなく、杖という限定要素によって限定された人の知覚であるのと同様である。

シュリーダラは次の様な論式を用いている。

[P] 「二つの実体」なる知覚は限定要素の知覚に先行される。

[H] なぜなら、(その知覚は) 限定されたものの知覚だからである。

[U] 例えば、「杖を持つ人」なる知覚の様に。⁽²⁶⁾

かくの如く、限定されたものの知覚である以上、その知覚は必ず限定要素の知覚に先行されなければならないとされる。つまり、限定されたものの知覚の場合、限定要素の知覚はそれに対しては原因ということになるのである。かくして、この「二つの実体」なる知覚に先行する限定要素の知覚は自ら明瞭に想定され得ることになる。すなわち、二数体なる性質の知覚がそれである。また、二数体の知覚が実体の知覚に先行して存在することは、逆にそのことによって保証されるのである。全く同様にして、二数体の知覚に先行する知覚は二数体一般なる普遍の知覚であり、逆に後者が前者に先行して存在することがそのことによって保証される。⁽²⁷⁾

ところで、今まで述べ来た限りに於ては、限定要素の知覚は、限定されたものの知覚とは一応別個のものとして先行して存在するとされた。しかし、別の前提に立った時には、両者の非同時性は認められなくなる。

シュリーダラは次の様な異論を紹介する。

「ところで、『限定要素と限定されるものは同一の知覚の対象である』と称する人々にとって『香りのよい旃檀』(という知覚)の場合如何なる事態が生じているのであろうか。すなわち、視覚器官は香を対象とせず、嗅覚器官は実体を知覚しない(見ない)。したがって両(感官)は(両対象の)関係を知覚しない。……(略)……この両対象(芳香と旃檀)は、視・嗅覚器官が同時に生起して生ずるものであろう。このことは両原因(両感官)の能力によるのである。⁽²⁸⁾」

彼はこの異論に対し、知覚は部分を有しない(nirbhaga)、もしも異論の通りであるとすれば、知覚が部分を有

する (sahajaga) ことになり、視覚、嗅覚等が同一知覚の内部で錯綜して混乱を来す、という様に論駁を加え、次の様な論式を提出している。

〔P〕 論争の的となっている、限定されるものの知覚は、ただ限定されるものを対象とするものでしかない。
(限定要素をも同時に対象とすることはない。)

〔H〕 なぜなら、(その知覚は) 知覚 (pratyaksa) であり、かつ、限定されるものの知覚 (ijnana) だからである。

〔U〕 例えば、「香りのよい旃檀」という知覚の様に⁽³¹⁾。

しかし、「限定されるものを対象とする」という点に関しては、その具体的な意味をめぐって次の様な反論が打ち出される。

「もしも、単なる実体そのものが限定されるものの知覚の対象 (alambana) であるとすれば、仮令限定要素が存在しない場合に於ても、同様の知覚 (pratyaya) が可能であろう。また仮令、限定要素は (限定されるものの知覚を) 生ずるものであるから、それが存在しなければ限定されるものの知覚が生ずることがないことになってしまうと (考えられると) しても、これ (限定されるものの知覚) が実体そのものの知覚 (pratyaya) と異なることはない。なぜなら、対象が異なるいならば、知覚も別に異なることはないからである。」⁽³²⁾

「限定されるもの」を「実体そのもの」と見做せば反論の如くなるが、シュリーダラは、この知覚の対象は飽くまでも「実体そのもの」とは異なる「限定されたもの」(visista) でなければならぬとする。「限定されたもの

であるということ (vīṣiṣṭa) は (ものの) 本性 (svarūpa) とは全く異なったものである。⁽³³⁾ 例えは「杖を持つ人」(dāṇḍī) の知覚の場合、対象は単なる人 (puruṣamātra) でもなければ単に杖と結合していること (dāṇḍa-samyogitā-mātra) でもなく、杖が付属していること (dāṇḍopasarijanatva) ということによつて他の人々と異なる (vīlakṣaṇa) 人に外ならないのである。この故にこそ限定要素 (vīśeṣaṇa) は決定要素 (vyavachēdaka) と称されるのである。⁽³⁴⁾

さて以上のことを基として、過程 (3) (図表の⊙)、過程 (5) (図表の⊙)、および過程 (6) (図表の⊙) を検討しよう。

まず、過程 (3) に於て、PBA は次の複合語を用いている。

ekatvasāmānya-tatsambandha-jñānebhyaḥ⁽³⁵⁾

シェリーダラは、「限定要素の知覚は限定されるものの知覚の原因である。そして、二つの一教体は限定されるものであり、一教体一般は限定要素である。したがつて、まず初めにそれ (一教体一般) に対してこそ知覚が (生ずると) 考えられる」と述べた後、この複合語を次の三者に分解する。

- ① 一教体一般 (ekatvasāmānya)、② され (tad)、つまり一教体一般の、一教体なる性質との関係 (sambandha)、⁽³⁶⁾
- ③ 知覚 (jñāna)⁽³⁷⁾

この知覚が一教体一般の知覚であることは文脈上明らかである。

ウダヤナの解釈も同様であるが、②の関係を内属関係 (samavāya) であると明記している。⁽³⁸⁾

ヴィヨーマシヴァによる複合語の分解も同様であるが、②③が具体的に何を指すのかということは直接述べられていない⁽³⁹⁾。しかし、この直前に、限定要素の知覚は、限定されるものの知覚の原因であるから、それよりも先に生ずる、と述べていること⁽⁴⁰⁾から、③が二数体一般の知覚であることが知られる。

次に、過程(5)に於て、PBh は次の複合語を用いている。

dvitvasāmānya-tatsambandha-tajjānebhyaḥ⁽⁴¹⁾

シュリーダラの解釈は次の通り。

①二数体一般 (*dvitvasāmānya*)、②それ (*tad*) の「二数体なる性質との関係 (*sambandha*)」、③知覚 (*jñāna*)⁽⁴²⁾。
ウダヤナも分解の仕方は同様だが、具体的な註記を与えていない⁽⁴³⁾。

ヴィヨーマシヴァは、②の「それ」を「二数体一般」と置き替え、③を「二数体一般の知覚」としている⁽⁴⁴⁾。
次に、過程(6)に於て、PBh は順序を少し入れ替えた次の複合語を用いている。

dvitvaguna-tajjāna-sambandhebhyaḥ⁽⁴⁵⁾

シュリーダラは何ら註記を加えることなしに次の様に分解する。

①二数体なる性質 (*dvitvaguna*)、②それ (*tad*) の知覚 (*jñāna*)、③関係 (*sambandha*)⁽⁴⁶⁾。

ウダヤナは、性質の知覚が実体の知覚を生ずるとし、②が二数体なる性質の知覚であることを示唆している。また、「限定要素(二数体なる性質)、およびその関係 (*tatsambandha*) に就いては先に既に確定して、他に必要なもの (*apeksanīyāntara*) は存在しないか、△……」⁽⁴⁷⁾

という様に、「関係」は過程(3)(5)の場合と全く同様であることも示唆している。これに従えば、③は、二数体なる性質と実体との関係と解釈して差支えない。

ヴィヨーマシヴァは、「先述通り」(tathokta)という修飾語を付けて同様の分解を行なっている。⁽⁴⁸⁾

以上検討してきたことより、限定されるものの知覚 (viśeṣya-jñāna) を生ずる原因は、次の三者として定式化する事が出来る。すなわち、

- (i) 限定要素 (viśeṣaṇa)
 - (ii) 限定要素と限定されるものとの関係 (viśeṣaṇa-viśeṣya-sambandha)
 - (iii) 限定要素の知覚 (viśeṣaṇa-jñāna)
- である。

ところで、ヴァイシシェシカ学派の知覚論に於けるこの様な三原因 (karaṇa-traya) の定式化は、直接には VS 8, 9 の定句に基づいたものであると考えられる。

VS 8, 9 は次の通りである。

「内属してゐる白さから、白さの知覚から、白さものの知覚がある。その二つは因果関係にある。」(samavāyinaḥ śvātyāc chvāitya-buddheḥ śvete buddhis te kārya-kāraṇa-bhūte)⁽⁴⁹⁾

この定句に対して、諸註釈書は次の様な解釈を行なっている。
まず、CAは次の様に解する。

「白色なる性質に内属する白色一般なる普遍から、そして白色一般なる普遍の知覚から、白色なる性質の知覚が生ずる。普遍と性質との関係も留意されねばならない。この故に、限定要素の知覚は原因であり、限定されるもの知覚は結果である。」⁽⁵⁰⁾

先述の三原因のうちここで直接述べられているのは限定要素の知覚だけであるが、*U. pas.*では次の様にすべて打ち出されている。

「『内属している……から』
『白色なる性質と実体との関係から、』
『白色から』
『白色なる性質から、』
『白色の知覚から』
『白色なる性質の知覚から、』
『白いもの』
『白色なる性質によって限定された布の知覚が生ずる。このことは他の場合においても（通用する）。』
『その二つ』
『限定要素と限定されるもの知覚、および限定要素の知覚と限定されたものの知覚、は『因果関係にある。』
（このことは）
両者の有無関係を補助とする知覚によって確定される。なぜなら、限定要素と（限定されるものと）の関係・限定要素・（限定要素の）知覚があれば限定されたものの知覚が生じ、（前者が）なければ（後者は）生じないからである。」⁽⁵²⁾

U. pas. も同様に解する。

「……かくして、『白い法螺貝』等の知覚の場合、白色の内属と、白色なる性質と、白色なる限定要素の知覚とが原因であると言われたのである。かくして、限定要素と（限定されるものと）の関係・限定要素・その知覚は、限

定されたものの知覚という正しい認識に対して原因であると(言われたのである)。……」⁽⁶³⁾

以上の如く、VS 8. 9 は限定されたものの知覚 (visiṣṭa-jñāna) の構造を示すものとして、所謂「三原因」(kāraṇa-traya) 理論の基礎をなすものである。

プラシヤスタパーダも、過程(3)(5)(6)の様に、明らかにこの理論を前提としているのである。現に彼は同じ「数体章」(saṅkhyā-prakarana) の中で VS 8. 9 を引用している。彼がこの定句を引用している個所は、本稿の次のD節で扱う論議と関わりがあるのだが、要するに、「二数体(性質)が既に消滅して存在していなくとも、二数体の知覚が存在していれば、それだけからでも実体の知覚が生ずることは可能である」とする見解を斥ける個所である。⁽⁶⁴⁾

該定句を引用する前に、彼は次の様に述べる。

「なぜなら、限定されるものの知覚は、(限定要素と)同類であるため、限定要素との関係なしには存在し得ないからである」⁽⁶⁵⁾

この「同類である」この(sātṛpya)とは、ウタヤナにすれば「同質性」(sādharmya)「同格関係」(sāmānādhikarṇya)と同義である。⁽⁶⁶⁾ また、シュリーダラによれば、これは、限定されるものの知覚は限定要素によって染められてくる(ānurakta)この、逆に言えば後者は前者を染めている(ānurañjaka)この、やはり、限定要素は限定されるものの本質(svartpa)であるこの、限定されるものに自らが付属してなるこの(svopasarjanatā)を知

覚させる原因 (prati-karana) であることを示す⁽⁸⁸⁾。ところが、現に存在していないものにはそのようなことはあり得ない。したがって、「二つの実体」なる知覚が限定されるものの知覚である以上、その実体の限定要素である二数体なる性質は、「二つの実体」なる知覚が発生する際に必ず存在していなければならない⁽⁸⁹⁾。

PBh でこのすぐ後に引用される VS. 8. 9 にブラシャスターパーダ自身は何ら註釈を施していないが、今までの考察から、彼がこの定句を「三原因」理論の確定材料として引用していると見做すことが出来よう。

因に、この定句に対する KA, NK, VV の解釈は、先に紹介した CA, Vy, Up. のそれと基本的に何ら異ならない⁽⁹⁰⁾。

D 知覚の非同時性に就いて

ヴァイシェーシカ学派の発生・消滅の理論は、多くの知覚 (jñāna) が同時には存在し得ない、という原則に立脚している。勿論、これはヴァイシェーシカ学派が内官 (manas) を単一で微小なものであるとすることが基礎になっている⁽⁹¹⁾。

ところで、同時に存在し得ない、両立し得ない (virodha) とは如何なる状態を指すのであろうか。PBh によれば、それには二つの場合が考えられる。一つは、文字通り「共存不可能」(sahanavasthāna) という場合であり、一つは「殺されるものと殺すもの」(vadyayaghatāka) という場合である⁽⁹²⁾。仮に A と B の二者があつて、A が先に存在するものとしよう。「共存不可能」という場合、B が発生した瞬間には既に A は消滅している、つまり A と B が

同時に存在することは文字通り全くないことになる。これに対して「殺されるものと殺すもの」の場合、AはBが発生した瞬間の次の瞬間に消滅する、つまりAとBとは一瞬間だけは同時に存在することになる。

では、数体論に於ける知覚の場合はそのいずれであらうか。これは図表からも一見して理解出来る様に、「殺されるものと殺すもの」の場合である。理由は以下の如くである。

もしも知覚の不両立が所謂「共存不可能」を意味するとすれば、ヴァイシェーシカ学派の知覚論の構造上、数体論が破綻を来す結果になるのである。すなわち、二つの知覚が同時に存在することは全くあり得ないのであるから、過程(5)に於て二数体一般の知覚が生ずると同じ瞬間に契機知は消滅しなければならぬ。契機知が消滅するのであるから、やはりその同じ瞬間に二数体が向消滅状態に達する。したがって、次の瞬間に二数体の知覚が生ずると同時に二数体は消滅する。かくの如くであると、「二つの実体」なる知覚が生ずるために必要な原因が、この瞬間に於て欠如していることになり、「二つの実体」なる知覚は遂に生じ得ないという帰結に陥ってしまう。⁽⁶³⁾つまり、先の如く、この実体の知覚は限定されるものの知覚である以上、その発生のためには、「三原因」(kāranatraya)がなければならぬ。すなわち、(i)二数体、(ii)二数体と実体との関係、(iii)二数体の知覚の三原因である。しかし今見た様に、(i)が、したがって(ii)も欠如していることになり、実体の知覚も生じ得ないのである。よって、知覚の場合には「共存不可能」説でなく、「殺されるものと殺すもの」説が採られねばならないのである。

四、結

以上、ヴァイシュニカ学派の数体論に若干の考察を加えてきた。数体論は PBr の中でも最も難解なものの一つであるが、少くともヴァイシュニカ学派の諸原則は非常に厳密に守られていることが理解出来よう。つまり、その議論世界の中に於ては、巧みに計算し尽された、極めて首尾の一貫したものであると言える。この数体論を一見複雑なものにしているのはヴァイシュニカ学派の知覚論、それも、限定されるものの知覚 (*viśeṣyairāna*) に関する「三原因」理論である。したがってヴァイシュニカ学派の数体論の要は知覚論であると言えよう。実際、論争史上数体論に対する批判は結局知覚論に対する批判に集約されている。特に NK ではこの点に関する仏教徒との論争に長大なスペースが割かれている。⁽⁹⁾ この論争には、ヴァイシュニカ学派の数体論を通して同学派の哲学体系の根幹に触れる重要な問題展開が見られるのであるが、その検討は本稿では割愛し、他日を期したい。

(日本学術振興会奨励研究員)

略号表

- CA: Candrananda's *Vṛtti ad Vaiśeṣikaśāstra* (*Vaiśeṣikaśāstra of Kaṇāda with the commentary of Candrananda*, ed. by Jambuvijayaṅ. Gaekwad's Oriental Series No. 136. Baroda: Oriental Institute, 1961).
- KA: Udayana's *Kiraṇāvali* (*Kiraṇāvali of Udayana-carya*, ed by Jitendra S. Jety, Gaekwad's Oriental Series No. 154. Baroda: Oriental Institute, 1971).
- NK: Śrīdhara's *Nyāyakanḍalī (Prasastapadābhāṣya with Commentary Nyāyakanḍalī of Śrīdharabhāṭṭa*, ed. by Kṣetresachandra Cattopadhyaya, Gaṅganātha Jhā Granthamālā Vol. 1. Varanasi: Varanasya Sanskrit

- Vishvaavidyalaya, 1963).
- NS: *Nyāyasūtra (Śrīgautamanūnīpuraṇītiyāyasthūṇi*, ed. by Dīgambara Śāstri. Anandāśrama Sanskrit Series 91. Poona: Anandāśrama Press, 1922).
- PBh: *Prasūtapādabhaṣya* (the same as NK).
- SDS: Mādhaḥva's *Sarvadarśanasamgraha* (*Sarva-Darśana-Samgraha of Śāyana Mādhaḥva*, ed. by Vasudev Shastri Abhyankar, Poona: The Bhandarkar Oriental Research Institute, 1924).
- SM: Viśvanātha's *Siddhāntamuktavali ad Karikāvālī (Kārikāvālī*, ed. by Nārāyana Tirtha. Kāshī Sanskrit Series 16. Benares: Jaykrishna Dāss Gupta, 1923).
- TBh: Keśavamiśra's *Tarkabhāṣā (Tarkabhāṣā by Keśavamiśra*, ed. by Narayan Nathaji Kulkarni, 2nd Ed. Poona: Oriental Book Agency, 1953).
- TS: Annambhaṭṭa's *Tarkasamgraha (Tarkasamgraha of Annambhaṭṭa*, ed. by Y. V. Athalye, revised and enlarged, Second Ed., Bombay Sanskrit Series No. 1. V, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1974).
- Upas.: Śankaramiśra's *Upaskara ad Vaiśeṣikasūtra (The Vaiśeṣika Darśana*, ed. by Jayanārayana Tarka Pan-

ヴァンシニシムシカ学派の教体 (samkhyā) 論 四二

chāna, Bibliotheca Indica, Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1861).

VS: *Vaiśeṣikasūtra* (the same as CA).

VV: Vyomaśra's *Vyomavati (The Prasūtapādabhaṣyam with a commentary Vyomavati*, ed. by Gopinath Kāvīrāj and Dhundhirāj Shastri, Chowkhambā Sanskrit Series No. 396, Benares: Chowkhambā Sanskrit Series Office, 1931).

Vy.: *Vyākha (Vaiśeṣikadarśana of Kaṇāda with an anonymous Commentary*, ed. by Anantlal Thakur. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduat Studies and Research in Sanskrit Learning, 1957).

註

(一) ャンシニシムシカ学派の samkhyā 理論は甚だ複雑であり、同学派の諸原則と精確に同じならざるを容易に理解せられ難く。そのため、一三世紀頃よりその様な俗諺が一般に流布して来たのである。

「一」教体 (の発生・消滅)・pakajotpati・分離より生ず

る分離に関して揺るぎない知識を有する者ぞ、人々はヴァイシッヘーシカ学徒と知る」

dvive ca pakajoppattau vibhage ca vibhāgaje/
yaaya na skhalitā buddhis tan vai vaiśeṣikam vidūh//
(SDS, *Auditvadarśana*, II, 81-82; TBh, p. 32, II. 5-6)

この谷藏中の pakajoppati (燃焼によつて生ずる性質の生起) 理論に関しては、拙稿「インド自然哲学の研究——ヴァイシッヘーシカ学派の pakajoppati 理論」(『宗教研究』二二五号、昭和五〇年九月、pp. 29-50) 参照。

「ヴァーンサー学派に於ての、性質 (guna) の一つとして *saṃkhyā* を挙げてゐるが、ヴァイシッヘーシカ学派の様に緻密な理論を展開することはない。むしろヴァイシッヘーシカ学派の *saṃkhyā* 理論の借入であると考えられる。 Cf. *Manmeyodaya*, ed. by C. Kunhan Raja (Madras; Theosophical Publishing House, 1933) p. 241, II. 9-10. ヴァイシッヘーシカ学派の *saṃkhyā* 理論に対しては特に仏教側から厳しい批判が加えられている。これは仏教側に独自の体系的な理論があるという訳ではなく、ヴァイシッヘーシカ学派の *saṃkhyā* 理論の核心をなす知覚論に対しての批判に、この性格を有するものである。仏教徒としての谷藏に関する論争は NK 註 25。また Śaṅkaraśāstra's *Tattva-saṃgraha* (GOS) 638-646 を参照しよう。また、リャーヤ

学派の異端児 Bhāsarvaina が *saṃkhyā* と関して異論を唱えてゐる、王統派のこの論難を述べよう。 Cf. KA, p. 124, II. 13-18; Upaś., p. 311, II. 4-8. 以下は他学派等との異端なる批判、また後世のチャキヤ・リャーヤ学派の新理論の検証も、稿を収めて発表するつもりである。

(2) *ekādivyavaharāhetuḥ saṃkhyā* (p. 267, 1. 1)
(3) NK, p. 267, II. 6-8; KA, p. 124, II. 4-5, II. 19-20; VV, p. 455, II. 19-21.

(4) *sā punar ekadrayā cānekadrayā ca/ tatraikadrayāyāḥ saṅgīdī-paramānūrūpādhānam iva nityānityavā-nispattayah/ anekadrayā tu dvitvādikā parārdhānā/* (PBh, p. 270, II. 1-3)

水 (*salila*) 等とは、水・火 (*tejas*) ・風 (*vāyu*) の二つである。地 (*pṛthivī*) の原字 (*parāmanu*) の場合と同様に、地の原字に内属する組 (*rūpa*) ・味 (*rasa*) ・香 (*gandha*) ・触 (*sparsa*) は常恒ではなく、燃焼によつて変化する。前掲拙稿 pp. 30-32 参照。

(5) 本稿 A に於て別論する。

(6) PBh の原文は次の通り。
yada boddhuś caksuṣā samānāsamanājātyayor drav-ya-yoḥ sannikarṣe sati tatsamyuktrasamavetasamavetaika-tvasāmānyajñānopattāv ekatvasāmānyatatsambandha-

(9) KA, p. 134, l. 6.

(75) NK, p. 289, l. 6.

(8) NK, p. 289, ll. 3-5. 限定要素 (viśeṣana) なること

を以て「象徴的な語」(upalakṣana) となすこと
については註(34)参照。

(5) なる PBh 文中の「限定要素との関係」が、「限定要素
と限定されるものとの関係」を意味することとは、例の

「三原因」語彙によつて明白である。

(6) 註(9)参照。

(19) Cf. VS 3.2.3; PBh, manahprakarana; NS 3.2.57-60.

(2) PBh, p. 287, ll. 1-2.

(3) PBh, p. 287, ll. 2-3.

(4) 参照。

(5) NK, pp. 295-314.